福山市議会だより
2004年（平成16年）12月号
―子どもが安心して育つ町づくり―

ゆうすけ通信

発行責任者／福山市議会議員 大田 祐介
後援会事務所／〒720-0825
福山市沖野上町2-15-32
TEL:084-932-7855
FAX:084-932-7858

vol.1

皆さん、こんにちは。大田ゆうすけです。皆様のお力で市議会に送り込んでいただいてから早いもので7ヶ月が過ぎ、緊張して臨んだ5月の臨時議会が昨日のことのように思い返されます。本会議、委員会、視察等を経験し、少しずつではありますが周囲を見渡せるようになってまいりました。またこの間、母の死、父の市長選、と人生において忘れることのできないめまぐるしい時を駆けてまいりました。多くの方に支えていただきましたことに感謝いたします。

本会議・委員会

所属会派は「緑風会」です。名称は僭越ですが私が提案いたしました。議会に「緑の風」を吹かせるべく頑張ります。常任委員会は民生福祉委員会、特別委員会は中心市街地の活性化等を議論する都市整備特別委員会に所属しています。

議会の議事録を詳しく読まれたい方や、議会の傍聴を希望される方は後援会事務所までご連絡下さい。お待ちしております。

6月議会・市立女子短大について

初議会の感想としては、非常に儀式的な雰囲気を感じましたが、代表質問の重みもまた感じることができました。緑風会からは、佐藤和也議員が代表質問に立ちました。

Q 市民病院の看護師採用と養成について

平成17年4月の救命救急センター開設に向けての対応や増床に伴い、看護師の採用を平成16年度には70名程度を予定されています。看護師不足が指摘されていますが、平成16年度以降の採用予定はどのようになるのか？また、市内の病院の看護師充足率はどのようにみているのか？

現在、市内の看護学校は2校で120名の養成を行なっておられます。しかし、平成20年には1校が閉校されると聞いております。そうなると益々看護師不足は切実なものとなり、市民病院及び、市内の医療機関への影響も大きいと思われます。市立高校の看護科を廃止した経緯はありますが、全国的な看護師不足を考慮する中で、市立短大等での正看護師養成を模索する考えはありませんか。

A 看護師の採用については、この度の70名の採用により、必要数はほぼ確保されるものと考えており、来年度以降の採用については、退職者の補充が主になると考えています。看護師の充足率については、平成15年度の検査の結果では、全医療機関において充足している状況でありました。

次に市立短大において正看護師養成を行なうことについては、18歳人口が減少し、女子の4年制大学志向の漸増など、大学を取り巻く環境が今後ますます厳しくなる中、本学の今後のあり方等については、「外部評価委員会」での、大学運営全般に関わる様々な意見や助言を参考にしながら検討する必要があります。

♣福山女子短大を訪問して

先日、福山市立短大の視察に行ってまいりました。

まず特筆すべき点は、授業料が安く、大学冬の時代にもかかわらず、入試は2倍を越える競争率だそうです。また学生の半数は県外の学生であり、福山市民は全学生の1／4だそうです。ただ、毎年3億円を超えるお金が一般財源より繰り入れされているので、もう少し福山出身の学生が増え、福山に就職する学生の割合が増えるよう努力する必要があるかと思います。

学長としては、短大は2年間という短期間では充分な専門教育ができないので、4年制大学への移行を希望されているようです。建物も老朽化しており、将来的には中央公園の中央図書館に隣接した場所に、4大として移転するという構想も面白いのではないでしょうか？

9月議会・防災について

緑風会からは、稲葉誠一郎議員が代表質問に立ちました。主に私の考えた質問を紹介します。

Q 子育て支援について

「乳幼児医療費を就学前まで無料にしてほしい。」との要望があります。6月定例会でわが会派としても要望いたしましたが、子育て支援の対策として取り組みをされてはと考えます。

Q 台風被害について

地球温暖化の影響もあってか、台風16・18号の上陸により昭和29年以来、観測史上最高の5mを超える異常潮位が記録され、沿岸部では多数の床上浸水などの被害が発生いたしました。抜本的な解決策はなかなか見つからないと思われますが、台風と満潮が重なる度に被害が発生しないよう、住民の生活を守るための具体策を講ずるべきであると考えます。

鞆町については、昨年の台風で仙酔島の桟橋の護岸及び遊歩道に亀裂が入り、危険な状態であったのが、やっと修理に入った矢先、今回の台風の高波や落石により完全に崩壊してしまいました。地理学上も貴重な1億数千万年前の断層や地層を見学するための島の遊歩道は観光資源の一部でもあり、この1年間、国・県に対して本市の修復に対する働きかけは充分とは言えず、結果として貴重な観光資源の一部が失われてしまいました。

この件は、福山の観光資源を守るという観点から見ても遅きに失した感がありますし、迅速な災害復旧への取り組む姿勢が欠けているのではないかという気がしてなりません。

♣その後の対応

乳幼児医療費については1回500円の負担は変わらないものの、入院費については対象年齢が小3から小6にまで引き上げられることとなりました。高潮対策として鞆の原地区と箕島の釜谷地区に「逆流防止弁」が設置されることとなりました。その他の対応も県と協議中とのことです。

（二面へ続く）

また、ばら祭りの会場となる緑町公園は「防災公園」として、緊急時の避難場所に指定されており、屋外ステージの下は災害備蓄物資が収納されておりますので、一部ご紹介します。

乾パン:6272食／アルファ米:3430食（湯を注ぐだけで食べられる）／毛布:4550枚／ビニールシート:655枚／仮設トイレ:6（一般用）9（身障者用）／発電機:10台／テント:10張り、他にも災害救助・復旧に必要な道具などもあります。また、ローズアリーナの飛び込みプールは常時満水にしてあり、飲料用ろ過装置が設置されています。

しかし、皆さん一人一人が災害に備え、食糧などを備蓄しておく必要があろうかと思います。災害発生から3日間をしのげば、各地より救援物資が届くようになります。それまでの間をいかにして耐えるかが、阪神大震災でも新潟中越地震でもポイントであったようです。

12月議会・障害者支援について

緑風会からは桑田真弓議員が代表質問に立ちました。私の考えた質問と、それに対する答弁を紹介します。

Q障害者の自立に向け、就労支援は喫緊の課題で、例えば今日やっと認知され始めた「高次脳機能障害」への施策も急がれます。

この障害は病気や交通事故など様々な原因で脳が損傷された結果、治療やリハビリ後、日常生活に支障の無い状態にまで回復した後に、記憶障害や、性格の変化により対人関係が保てないなどの問題が生じ、社会生活などに支障をきたし、退職せざるをえない状況、あるいは家族ともども社会から孤立する状況下にあり、外観からはなかなか判断がつかず、今は様々な制度の支援もうけにくいという状態です。

本市としての状況認識と今後の取り組みについてお聞かせください。障害が多岐に及び、かつ専門的になっている今日、障害者の就労促進のため、本市として専門のジョブコーチ（職場適応援助者）を置き、障害者の就労が促進されるよう取り組む必要があると考えますが、お考えをお聞かせください。

A高次脳機能障害は外見上分かりにくいことからその特性に着目した適切な支援がなされていない状況もあります。

国においては、支援モデル事業の結果を踏まえ、平成18年度からの制度化を予定しており、今後、国の動向を見極めながら研究してまいります。

次に、ジョブコーチについてです。ジョブコーチは、障害者の就職及び職場適応のための施策として実施され、県内に13人が配置され、障害者の職場適応を支援しています。

今後とも、関係機関と連携を密にし、障害者雇用の促進に努めてまいります。

♣高次脳機能障害で同じ悩みを持たれている方がおられましたら、大田記念病院に相談窓口もありますし、「シェイキングハンズ」という家族会もございますのでご一報ください。

決算特別委員会

♣下水道特別会計について

神辺町との合併については、神辺町より新設合併（対等合併）の申し出があり、編入合併を想定していた福山市との間に大きなギャップが生じています。

新設合併とはその名の通り、合併により新たな市を作る事です。市長も議員も新たに選挙を実施して選任し、条例なども新たに整備することとなりますので、合併特例法の期限の来年3月までに両議会承認を得ることは困難でしょう。神辺町が編入合併に方針転換しない限り、両市町の合併の見込みはかなり薄くなりそうです。

ところで、平成15年度決算特別委員会において、下水道特別会計について質問させていただきました。

Q下水道整備について、芦田川処理区整備計画の60%が完了したと聞いております。市民サービスの一層の向上とともに、芦田川の浄化が進むことと期待しております。

そこでお尋ねしたいのは、新市町との合併により、新市の下水道普及率が、合併前と比較してどのくらい上昇する見込みなのか、同様に仮に神辺町と合併した場合、現在14%という神辺町の下水道普及率が、どのくらい上昇する見込みなのかお示しください。

A平成15年末の新市の普及率は30%であり、10年間で50%にまで引き上げる予定である。神辺についての合併建設計画は未定であるので、下水道普及率の見込みは未定である。

Q周知のように芦田川の浄化が進まないのは、ひとつに高屋川の問題があります。

ここで合併の是非を問うつもりは毛頭ありませんが、仮に神辺と合併した場合、新市の例を見ましても、神辺の下水道普及率の上昇が見込まれます。それにより高屋川の浄化も進み、芦田川の浄化につながる可能性があります。また、合併処理浄化槽の設置も一層促進されることと思います。

合併によりこういった具体的な効果が見込まれるという事を、はたして市民は知っているのでしょうか？合併のメリット・デメリットについて、抽象的な表現でなく、この下水道の件は1例としても、より具体的な表現で市民に情報提供するべきかと思います。

A合併の目的等、協議会の模様など全体的なことはホームページなどで周知しているが、個々の事案については十分に説明できていないので、今後とも説明に勤めてまいりたい。

民政福祉委員会

♣RDF、ゴミ減量について

11月18日のRDF製造工場の火災事故発生からわずか4日後の22日には運転を再開したことを重視し、常任委員会で質問致しました。運転再開を急いだ理由は、事故後も日々運ばれてくるゴミにより、ゴミピットが満杯になり、減らすためにはRDF製造を再開するしかなかったのが実情だろうと思います。しかし、このような事故が続くようでは、発電に最小限必要なRDF製造という考えに切り替え、全市を挙げてゴミ減量に取り組むべきではないかと提案いたしました。何しろ福山市民1人が1日に出すゴミの量は1123gもあります。ゴミ減量に先駆的に取り組んでいる札幌市や名古屋市では7～800gであり、「ゴミゼロ宣言」をした徳島県の上勝町では350gです。これらの町と比較していかに福山のゴミが多いか、お分かりと思います。今こそ「ゴミ非常事態宣言」を出して、ゴミ減量数値目標を定めて取り組まないと、またRDF製造施設にトラブルが発生した場合、市内にゴミがあふれる事態も起こりかねません。皆さん一人一人が我が事と考え、ゴミ減量に取り組みましょう。

応援しています

♣中国帰国者の会

引き上げてきた中国残留孤児や、その二世・三世達が福山にも大勢おられますが、日本人の血を引きながらも日本の習慣や言葉に慣れないために、就学・就労において大変な苦労をされています。同じ日本人として手を差し伸べる必要があります。

♣福山リトルシニア

中学生を中心とした硬式野球チームのお世話をさせていただく事となりました。20年近く福山から甲子園出場が途絶えている状況を打破したいものです。

福山が好きです。

父と母

市長選

暑い暑い夏。父・大田こうすけが市長選に立候補しました。私も息子として部下として、父の企画力・行動力・手腕は十分承知していますし、父こそ福山をより良い町にする事ができる人物と確信しておりましたので、全力でサポートしました。

短い選挙戦でしたが、本当にいろいろな事がありました。選挙にはつきものとはいえ、あまりにも激しい誹謗中傷には参りました。政策で戦い抜きたかっただけに、残念でなりません。選挙後の決算特別委員会においては、市民の皆様に投票判断材料を提供するために、選挙管理委員会から「選挙公報」を発行するよう要望しました。

この度の選挙は、私自身は選対の事務方に徹しておりましたので、ご支援いただいた皆様の元に挨拶に行くこともままならず、誠に申し訳ありませんでした。確固たる組織も無く、常時10名ほどしか常駐していない選対でしたが、よくぞこれだけの票をいただけたものだと感じております。

60,696人の市民の皆様、大田こうすけをご支援いただき、本当にありがとうございました。皆様の声を無駄にしないように、今後の市政に生かせるよう努力してまいります。

母の残してくれたもの

母の死から半年が経ちました。一周忌を目途に「大田祥子遺稿・追悼集」を発行するために、日々の活動の合間に母の書いた書類や写真に目を通しています。筆まめだった母は、かなりの量の日記、山行記録、俳句・短歌、絵手紙、講演録、写真を残していますので、その整理だけでも大変です。

先日、母を偲ぶ皆様が集まって「福山ヒマラヤクラブ」という山登りの会が結成されました。下は3歳から上は80歳というバラエティに富んだ会で、いつかはヒマラヤに行こうという会です。

母が私に残してくれた自然を愛する心を大切にし、この心で福山をより良く変えていかなければいけません。しかしながら、未だにひょっこり帰ってくるような気がします。

イベント

私のテーマ「環境と教育」を少しずつ形に表したいとの思いから、仲間とイベントを企画しました。それぞれ盛況に終わり、ぜひ来年も続けて行ないたいと思っておりますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

芦田川関連イベント

★9月26日に「第1回芦田川カヌー4時間耐久レース」が開催されました。国土交通省の外郭団体が発行する、～川の未来を考えるコミュニケーションマガジン～「ポータル」11月号に掲載してもらいましたので、裏面にご紹介します。

★また10月10日、福山市ほか流域市町による「芦田川水系の水を守る会」主催の、「自然まるごと芦田川探検隊」に参加しました。河佐峡にて、子供たちが川で魚を捕まえたり、ネイチャーゲームに講じたり、カヌーに体験試乗するイベントで、100人の子供達が本当に目を輝かせて楽しんでいたのが印象的でした。環境保全課の皆さん、お疲れ様でした。

駅伝関連イベント

★11月14日、「第1回グリーンライン駅伝」が開催されました。

私も実行委員の一員として、グリーンラインの活性化と、町おこしとしての駅伝の活用及び福山のスポーツ振興を目的として準備を進めてまいりました。

小雨がぱらつくあいにくのコンディションの中、14チーム84人の選手がアップダウンの激しい、全6区間総延長20㎞のコースを駆け抜けました。優勝は「駅前国輝堂RC」、2位は「福山鉄人会」、3位「鞆の浦RUN DEブー」という成績で、14チームの中には、下は6歳、上は75歳という幅広い選手層であり、皆さんスタッフの心配をよそに健闘されました。当初はこんな厳しいコース設定で選手が集まるか不安でしたが、皆さんチャレンジ精神旺盛というか、変人（笑）なのか、大いに苦しみ、そして楽しまれた様子です。

★平成17年4月中旬頃に緑町公園内遊歩道（1周1㎞）を使って、2～5人のチームで42周する「緑町公園周回リレーマラソン」を企画中です。

★昨年5月のばら祭で行われた「スタンプラリー」を走ってめぐる、「バラのたすきリレー」をまた予定しております。

広島県福山市［芦田川］

カヌー4時間耐久レース開催 楽しく遊んで川に親しみ 川の再生に向けて第一歩を！

広島県福山市草戸町の芦田川で，9月26日，「第1回芦田川カヌー4時間耐久レース」が開催された。中洲の周囲を回る約1kmのコースを4時間で何周できるか，周回数を競うもの。福山市，岡山県笠岡・井原両市などから参加した21チーム約60人が，心地良い風に吹かれながら懸命にパドルを操った。

主催したのは「小田県笹舟カヌークラブ」。福山市の大田祐介さん，笠岡市の馬越裕正さん，井原市の上田勝義さんという若手市議会議員がつくったグループで，カヌーを通じて河川環境を考えようと企画したイベントだ。

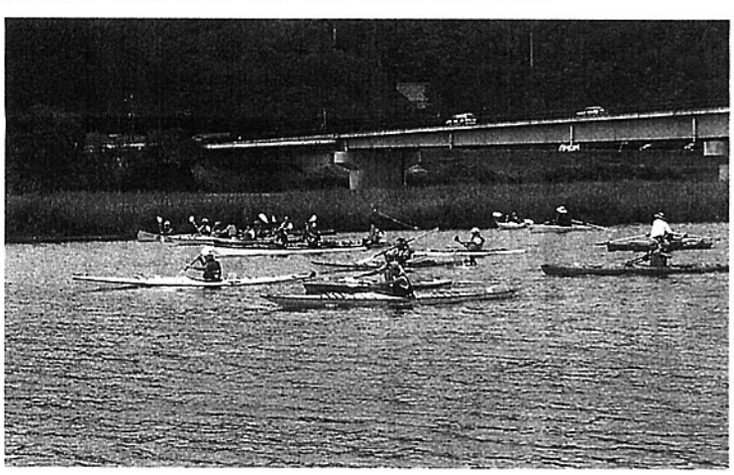
「小田県」というのは，明治時代の廃藩置県により誕生したものの，わずか3年で再編成により消滅してしまった芦田川流域のエリア。芦田川再生のために，「旧小田県」にちなんで有志が集まり，流域ネットワークをつくったのだ。

「固定した組織ではなく，テーマ性のあるイベントを企画しながら，その都度，関心のあるメンバーで活動していく緩やかな集合体です」と，呼び掛け人の1人である大田祐介さんは言う。

カヌーによる川下りなどは全国各地で開催されているが，耐久レースというのは珍しい。大田さんに尋ねると，こんな答えが返ってきた。「中国地方の一級河川の中で31年連続水質ワースト1という芦田川です。直接的な原因はいろいろありますが，人と川の絆が断ち切れてしまったことが大きいと思います。川で遊ぶ機会がなくなってしまった今の時代，川で遊ぶことが清流復活という川の再生に向けた第一歩ではないでしょうか。芦田川がどんな川なのか知ってほしい。芦田川で楽しい思い出を作ってほしい。そんな思いから，漕いで通り過ぎるのではなく，1カ所にとどまって川と付き合う耐久レースを企画しました」。

事務局を運営した村上泰弘さんは「30年以上，ワースト1の川のまま芦田川を放置しておいた元市民として今年は，カヤック仲間と芦田川の清掃活動をしたということもあり，今回のイベントをお手伝いさせていただきました」と言う。

当日の天候は，曇のち晴。午前9時にレース開始だ。女性や60歳以上のシニア世代など，元気いっぱいの60人余りの参加者計21チームが，1人乗りあるいは2人乗りのカヌーで一斉に漕ぎ出した。途中で乗り手を交代しながら午後1時まで続けて周回。



午前9時にレース開始。心地よい風に吹かれながらパドルを漕ぐ参加者たち

ゴールの後で参加者全員が笑顔で記念撮影

優勝を狙って脇目も振らず漕ぐチーム，マイペースで頑張るチーム，家族サービスを兼ねたチーム，カヌー初体験で真っすぐ進まないチーム，自作艇の航行試験をするチームなど，レース展開もさまざま。艇上から河原のチームメートに「疲れた」「交代して」などと叫んだり，景色を楽しみながらのんびりとコースを巡る参加者もいる。また，河原でジョギングしている人や釣り人などが「頑張れー！」と声援を送ったり，川の中に入って遊ぶ子どもたちの姿も見られた。

「雨が続いたせいか，川の水は比較的きれいでした。しかし，河口堰により土砂が海に流れにくいためか，川の中央でも水深が30cm程度しかない箇所があり，川の素顔を観察できる良い機会にもなったと思います」と，自身もレースに参加した大田さんは当日の様子をそう話す。

午後1時，ダブル艇の部は「いちゃりば屋シーカヤッククラブ」が周回数19周，シングル艇の部では「TEAM SUIGUN SHO-KAI-清流」が周回数20周で優勝を決めた。レース参加者はもちろん応援していた人も，充実感と達成感に満たされたイベントだった。参加者の表情から手応えを感じた大田さんは，川と親しむ機会をこれからもつくっていきたいという。そして，「来年は10月2日に開催予定です。次回は，スタート時に横一列に並んだカヌーを伝って中洲に渡れるくらい参加チームが多いといいですね」と，笑顔で話していた。

問い合わせ先

小田県笹舟カヌークラブ
大田祐介

Tel	084-932-7855
Fax	084-932-7858
E-mail	orion@urban.ne.jp
URL	http://www.urban.ne.jp/home/kkochan

▲月刊 ポータル No.039 2004年11月号 43ページ　発行／財団法人 河川情報センター

編集後記

やっと念願のゆうすけ通信が発行にこぎつけました。以前に2度発送準備をしておりましたが、掲載内容の変更や母の死で直前になって投函ができず今日に至っておりました。やっと宿題が1つできあがった気分です。ホームページの方はできるだけ毎日「日記」を更新しています。ぜひ一度アクセスしてみてください。(K子)

ホームページ　http://www.urban.ne.jp/home/kkochan/　メール　orion@urban.ne.jp